ペスタロッチの未定稿『読書ノート』(1785 - 1797) にみる民俗学的関心
—生誕250年記念国際シンポジウム (1996, チューリッヒ) —

宮崎 俊明

(2002年10月15日 受理)

Das ethnologische Probleminteresse Pestalozzis in seinen „Bemerkungen zu gelesenen Büchern" (1785-1797) – ein Referat zum internationalen Symposium anläßlich des 250. Geburtstag Pestalozzis, 1996. Zürich –

MIZAYAKI Toshiaki

はしがき

本稿は，スイスのペスタロッチ研究所とチューリッヒ大学が主催して1996年1月15日から3日間，チューリッヒ大学と連邦スイス工科大学を会場に開催された「ペスタロッチ生誕250年記念1996年—ペスタロッチの影響史のための国際学術シンポジウム—」への招待に文部省派遣で参加した筆者の発表講演の日本語訳である。原文は，「ペスタロッチ　その影響史の視点，1996年ペスタロッチ・シンポジウムの発表集録」とした『新ペスタロッチ研究』(Neue-Pestalozzi-Studien) の第4巻，1996，265～275頁に収録されている。記念年は連邦議会や省庁から学会，大学，教育，福祉まで13の関係・協賛団体，総勢85名の代表が参加して，40件の企画行事が組まれる一大国民行事のひとつとされた。このシンポジウムが，その火蓋を切るものと位置づけられたのは，ペスタロッチをウイリアム・テルと並ぶ国民的英雄とするスイスの特質をあらわしていた。

この国際集会がみせた研究方向については，「ペスタロッチ研究の現在」として本誌（49巻，1988，159～185頁）に報じたので詳細は省略するが，新資料にもとづく歴史研究，社会史，なかんずく精神分析による接近，近代問題への問い，ナショナリズムや宗教界による歪めなど，ペスタロッチ像への揺さぶりやその揺らぎは論議で避けて通れない現実となった。このことは，もうペスタロッチ研究は終わったのではなく，その読み直しで新たな開始を告げたともいえる。形どおりにいえば，分科会は「社会的，政治的，宗教的な思想とその変容」「人間学，哲学，精神史」「教育方法と学校」の3つが設定されたが，発表者29人のうち半数がドイツから，それにイタリア，フランス，日本からが4人であり，総じてかれらは年配者として水準の高さをみせ，他は若手を含めスイス本国からであった。

筆者の場合，18世紀にすでにあった民俗学的な視角をペスタロッチにも指摘し，政治的，宗教的，イデオロギー的な，旧来の把握にいささかのものいいを試みようとした。これは，ドイツで公刊した小著『ペスタロッチとその読書』(1992) で示した未公刊テキストを踏まえている。今や，教育者が精神分析の対象になり，その相対化，非神話化が問題になるところにきており，逆に，こどもと民衆に呼びかける愛の教育者像の一元化や読・書・算とその方法開発などに研究は満足していない。

本稿に関連して事後の補注はつけなかった。ただ，ペスタロッチの全29巻の全集（PSW），全13巻の書簡集（PSB）は基本テキストだが，それ以外にペスタロッチの足跡を上の小著で示しえたと思う。道は遠いが，おもしろいところだ。

発表日本語訳　「ペスタロッチの未『読書ノート』(1785－1797) にみる民俗学的関心」

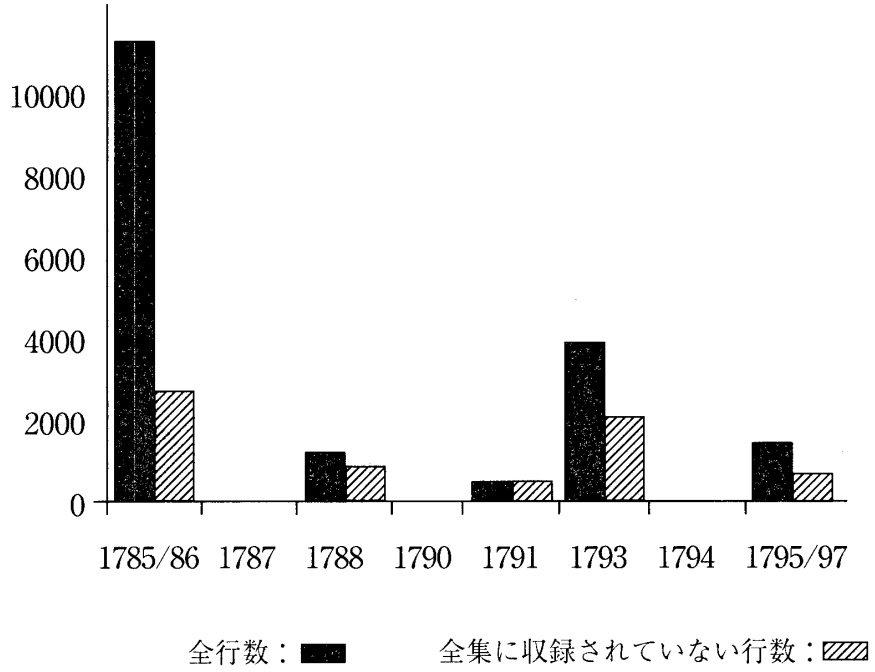
1801年，ペスタロッチはその『ゲルトルートはどのようにその子らを教えるか』でこう書いた。「わたしはここ30年来，本など読んだことはなかった。また，読めもしなかった」(PSW XIII,196, 以下，テキストの表示は“PSW 巻号，頁”で記す）と。しかし，われわれはこの文章をそのままに受け取らない。かれ自身とて自分のしたことについてこんなにひどい思い違いはしないだろう。事実，ペスタロッチは多くの本や雑誌を読んできた。かれには1785年から1797年にかけ，まるで自分の原稿の下書きをするかのように抜書きなどを詳細に記した『読まれた本の記録』がある。〔以下，『読書ノート』という〕この資料は1927年以来，H. シェーネバウム（H. Schönebaum）が検討して校閲し，いわゆる批判版全集の第9，10，11巻として1930，1931，19331年に公けにされた。わたしは，1982年と1983年にそのマニュスクリプト（手稿）（チューリヒ中央図書館蔵マニュスクリプト番号315－321，332，333，338－344，357，の400枚および元東ドイツ教育学アカデミー文書館，現ドイツ教育史研究図書館の7枚）を，シェーネバウムの版本と比較検討したが，その結果，手稿の全約14700行のうち約5400行がその単行本や雑誌の図書種別，主題，言語のフランス語やラテン語などで全体ないし部分が収録されていない事実や年次的な変化を確認した。もちろん，それには読まれた図書からの，長短おりまぜての，文字通りの抜き書きも含めてである。(図1，2参照　　ここに貼り付け)

1. 『読書ノート』のマニュスクリプト（手稿）の全行数と批判版全集に未収録の行数

	全集 IX	全集 X	全集 XI	合計	%
アフォリズム	2280 (297)	60 (0)	—	2340 (297)	15.9
単行本					
ドイツ語	3446 (925)	2176 (1222)	—	5567 (2115)	
フランス語	—	2042 (1406)	185 (155)	2267 (1561)	
ラテン語	—	191 (155)	—	191 (155)	
不明	—	67 (6)	—	67 (6)	
小計	—	—	—	8052 (3837)	54.7
雑誌	3317 (888)	46 (32)	—	3363 (920)	23.8
ドキュメント	—	—	956 (408)	956 (408)	6.6
合計	9043 (2120)	4527 (2821)	1141 (563)	14711 (5642)	
%	61.9	30.7	7.4		

PSW=Pestalozzi Samtliche Werke, 1927ff (『ペスタロッチ全集』批判版)
(　) ＝全集に収録されていない行数
単行本26タイトルの言語別冊数：ドイツ語　17冊，フランス語　7冊，ラテン語　1冊，不明　1
雑誌5種のタイトル数　38，執筆者　35名

2.『読書ノート』の抜き書きの行数の年次別変化―全行数と全集に収録されていない行数の比較



たしかに，ペスタロッチの手書きの多くは，シェーネバウムによる資料批判の作業ですべてではなく，いわば本文のない注解の形式で公開され，研究者に言及されてきた。しかし，わたしのこの発表では，狭義の編集テキストでなく，これまでかならずしも開かれていなかったその重要さや評価を問題にする。この『読書ノート』を表題化した論著は，A. イズラエル　1904，W. クリンケ

1923, J. G. クリンク／L. クリンク1968, クーレマン　1980, D. トレーラー／M. ミュラー1994）による，今日までの５種の文献目録にも見出せない。

また，この『読書ノート』は，従来，そのテキストの難易度の高さゆえにペスタロッチー研究にほとんど組み込まれず，あってもごくわずかだった。そのなか，シェーネバウムによる『ノート』の原資料の，前・中・後篇でいう前篇にあたる1785年と1786年の部分（PSW　第Ⅸ巻）に触れた論者としてA. ランク（1967），I. ビルク（1970），D. ホーフ（1987）ほかがいた程度である。それほどに，『読書ノート』の当分析は，ペスタロッチ研究におけるもっとも高いハードルだといって過言でない。当時の文献や関係資料を踏まえた研究が最近はエルカースとオスターヴァルダー（1995）によって出ているが，かれらが定式化したような，ペスタロッチをめぐる「伝説形成」論の危険は，『読書ノート』にはない。むしろ逆である。かれらより先に，わたしも，この注目に値する放置資料と長年係わってひとつのドイツ語著書の成果（Miyazaki, 1992）をもつが，『ノート』での全テキスト扱ったわけではない。今回の発表でもこの『ノート』を取り上げて，その論議の素材を明らかにし，さらなる前進の必要を専門研究の世界に提起する機会にしたい。そしてペスタロッチの問題関心をめぐって内容面で応え，さらなる理解をはかるため，そのテキスト・クリティークについて若干の指摘をしておきたい。

研究の第一の課題は，可能な限り正確なテキストの確認にある。ペスタロッチの『読書ノート』の場合，次のような特殊な問題がある。ペスタロッチ特有の記入法，断片的だったり，変更された抜書き文章，かれの着想，膨大な量の欄外記述，しかもこれら特殊な，直接には認識しがたいテキストのあつかいがある。それには他のさらなる文献研究による補充も必要になる。しかも，このような原資料やその版本と取り組むとき，そこに校閲者の認識関心や時代の傾向が流れ込みやすい。

ペスタロッチの書き抜き文章とそれに対するコメントや指摘，着想の断片には，かれが社会的，個人的にした注目のほかに，かれの思考過程が読み取れる。それだけに場合によっては，『ノート』はかれが生前に公刊した著作以上に歴史資料として重要である。

1920年代にシェーネバウムがこの『ノート』の校定をはじめたとき，かれは当時の精神科学的な方向づけにやむなく従わねばならなかった。その仕事は未完の形で残されたが，かれの校本は研究としてひとつの頂点を示している。

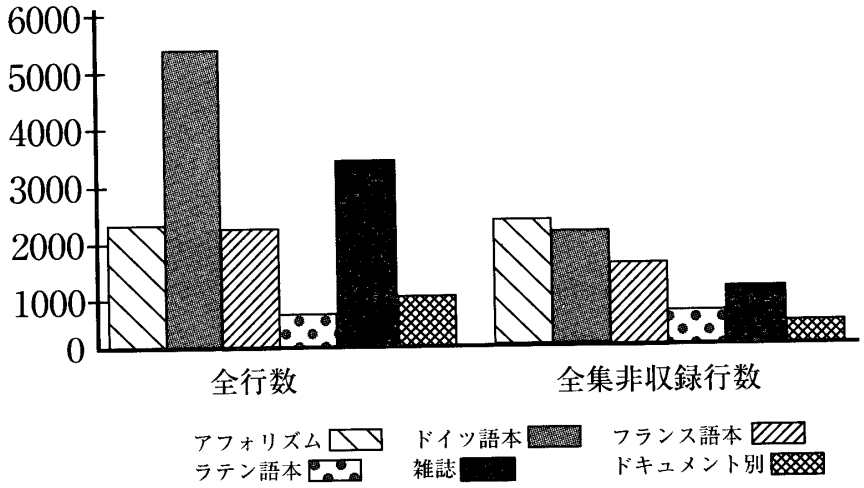
シェーネバウムの校本が未完に終わった要因や条件については，以前にも述べたが（Miyazaki, , 46ff），ここでもごく簡単に触れておきたい。マニュスクリプトには，その用紙と筆記内容の多くの損傷や，原稿のもともと読みとりにくさも重なって，そのトランスクリプション

(起こし) を仕上げにくくする必然性があった。その一方で，たとえば，フランス語の著書がドイツ語に十分対応する形で起こしきれず，あるいはできそうにないとの全集の監修者の判断理由や，その抜書きが低く評価され，全集ＰＳＷに収録されなかった。また，ペスタロッチが引き写したものと，かれがそこに随意に書き上げた文章との間にはしばしばズレがあり，そのような断片を再生し，関連付け，あるいは言及されるべきかどうかの決定も必要だった。たとえば，この『ノート』全体に登場する，ペスタロッチや，編者シェーネバウムが記入している約200人の人名は，それを正確に理解する手がかりにはなっても，いずれを重視すべきかといった問題をはらんでいる。ただ，これらの名前が示す文献や時代との関連，それがペスタロッチにとってもつ意義は，一部とはいえ，はじめて究明された。

上に述べたのように，ペスタロッチの『読書ノート』にはかれの思考過程と執筆の方法や技法が認められる。加えて，かれの下書きにはしばしばその個人事情も表に出される。ペスタロッチにも他の執筆者と同じように，調査のため図書を読み，情報を収集する必要があった。その意味ではかれは「天才」でなく，むしろ「学究」であり，後の著作のために『ノート』を作成したのである。ペスタロッチにも『ノート』はその著作過程のステップだった。(Miyazaki　54ff)

ペスタロッチの『ノート』には17種の単行本と５種の雑誌が登場する。単行本のうち９点がドイツ語，7点がフランス語，１点がラテン語の著作であり，雑誌では，かれは約40点の論文や書評に関心をもった。（図３）したがって，ひとつには，読書がペスタロッチの思想にどう影響したか，もうひとつには，かれがその著書や論文にどのような批評をしたか，これらの摘出がこの発表の課題になる。

３．『読書ノート』抜書きの種別，言語別行数その全集での全行数と非収録行数（アフォリズム，ドイツ語本，フランス語本，ラテン語本，雑誌，ドキュメント別）



ペスタロッチの位置を理解しうるには，われわれも自身の立場を設定せねばならない。先行研究にはペスタロッチをとりわけフランス啓蒙主義とドイツ観念論という主流に組み込んできた経過があった。また，その差異や，とりわけこれらへの，「教育的天才」ペスタロッチの対応を抽出し，時代の潮流のなかの代表的人物と結びつけてきた。しかし，現代の研究視点は社会史や社会人類学に向けられている。われわれが努めるのは，『上からの』『高い』啓蒙の精神史でなく，むしろ『下からの』『低い』啓蒙の教育史である。端的にいえば，その妥当性を後者に絞る定式化ができればと考えている。

まず，ペスタロッチが関心を寄せた雑誌論文に目を転じたい。その５種のジャーナルとその発行年は，Deutsches Museum（「ドイツのミューズ」）1785，Allgemeine Deutsche Bibliothek（「ドイツの一般図書」）1784，Berlinische Magazin der Wissenschaften und Künste（「ベルリン学芸誌」）1782，Berlinische Monatsschrift（「月刊ベルリン」）1783，Journal von und für Deutschland（ドイツおよび，ドイツのためのジャーナル」）1789であり，この順番でかれはひもといていった。なかでも，2番目はその書評のゆえに当時の出版傾向と読書関心を映しだす雑誌だった。

４．『読書ノート』での５種の雑誌の主題別論考総数と，『ノート』に登場する論考数（　　）

主題＼誌名	DM	Bmag	ADB	BMon	JD	主題別合計
宗教・神学	2	1	43(3)	4	16	66(3)
哲学・倫理学・心理学	5	7 (2)	13(5)	18(5)	3	46(12)
歴史・伝記	4	8(6)	27(2)	6	17	62(8)
地理・旅行記・地誌	10(1)	4 (3)	16	22	14	66(4)
言語・文学・芸術	62	5	59(1)	45	12	183(1)
社会・政治・法律	5	2	17(6)	13(1)	21	58(7)
自然誌・技術	2	1	21(2)	2	7	33(2)
教育	4	1	7	7	8(1)	27(1)
医学・薬学	0	0	23	1	4	28
農業・林業	0	1	8	0	1	10
経済・商業	4	0	6	1	2	13
軍事	0	0	5	0	0	5
家政	0	0	2	0	1	3
その他	11	1	8	4	15	39
雑誌別合計	109(1)	31(11)	255(15)	123(6)	121(1)	639(38)

DM: Deutsches Museum（「ドイツのミューズ」）1785年全２巻　各巻全562，570頁
BMag: Berlinisches Magazin der Wissenschaften und Kunste（「ベルリン学芸誌」）1782年４号　各部全　189，172，176，172頁
ADB: Allgemeine Deutsche Bibliothek　（「ドイツの一般図書」）1784年第４号　全622頁
BMon: Berlinische Monatsschrift,（「月刊ベルリン」）1783年，全２巻，各610，576頁
JD: Journal von und für Deutschland　（［ドイツの，ドイツのためのジャーナル］）1789年，第12部，全600頁

『ノート』には，上の5誌が掲載した論文へのペスタロッチの確たる問題把握がみえ，そこで用いられた言語もジャーナリスティクな傾向を示している。かれの関心が向いたのは，支配，倫理，情念，習俗文化，日常性などについての事実や思想であり，これらは当時しばしば広く論議の主題になっていた。それにかれが読んだフランス語の著書もその方向と深く係わっていた。さらにいえば，かれは「非アカデミック」ともいうべき読書サークルとコンタクトをもち，そこではしばしば直接的，日常的，生活実践的な仕方で世論というものをみつめたのである。ペスタロッチの知の世界は，このような日常の次元からこそ理解できる。

ペスタロッチには，具体的な社会問題に向けられた積極的姿勢が認められる。この関連ではわれわれの視線は，『ノート』に登場する，別のテキスト，「チューリッヒの婚姻判決書の抜書きへの制度史的にみたメモ」(1796) という16，17世紀の判決書にも投じられるべきだろう。ペスタロッチは家族や性別の役割関係の日常的，社会的な諸問題にかなりの関心をみせ，その主たる着眼を精神史や，教会に即して解釈するよりもむしろ社会の歴史から入手していた。

第二次大戦後，ペスタロッチの人間学がしばしば論議の主題になった。これは習俗の社会的現実との関連でとらえるなら，かれの場合もあてはまり，そのかぎりでは，哲学的人間学の方向よりもむしろ社会人類学ないし民俗学の方向だった。それに，ペスタロッチの人間学を哲学的だといわんとしても，かれの概念は，フランスの著者らがいわれていたような実際的ないしモラリストの「世間知」を含意し，かれ固有の教育的思考法もそこにみられるのである。

このようなペスタロッチの人類学的な思考法には，ヨーロッパ外部の文化への視線があることに留意する必要があろう。それをかれは読書を通してパラグアイの民族アビポナーに注目し，かなり詳しいノートをとっている。かれは，人類という一般概念がこのようなヨーロッパ以外の事実からもえられると着想した。

『ノート』の内容と形式の特徴として，1780年ごろのヨーロッパの時代状態と，ペスタロッチ自ら追究していた自己のアイデンティティの状態との反映がある。かれは，個人としては要求をもちながらもひどく幻滅したフランス革命の政治的公共性の危機的な状態についていわば下書きのようなものを記している。また，教育の見方や生活文化一般の危機的な現実についても抜書きやそのコメントで表現している。ここにわれわれは社会史的背景のまえにいるペスタロッチの現実像を入手し，ノートの内容に沿いながらそこに秘められているペスタロッチ受容の意味の転換に出会う。ペスタロッチの「非神話化」が登場するゆえんである。

さて，『ノート』に立脚しつつ，ペスタロッチの作品の民俗学的アスペクトを事例的，具体的に

示そうとするなら，それにはヨーロッパ外部の世界，ヨーロッパの現実を意味する『リーンハルトとゲルトルート』にあるスイスの生活世界だけでなくペスタロッチが視野に入れていたことを留意すべきであろう。

ペスタロッチは，宣教師のマルチン・ドブリッツホーファー（M. Dobrizhoffer, 1783－84）が発表したドイツ語訳3部作の紹介であるアビポナー民族の描写であるから様々な情報を取り出し，コメントをつけ，かつ思想的な展開もみせた（PSW Ⅸ 305f, 313－3156；Miyazaki 1992, 80ff, 337－353）。かれはこの民族にいわば軍事的貴族制や原始的民主制に共通するモメントを含むひとつの社会心術を見出した。かれが注目したのは，「完き原始制と土地所有制のはじまりとの中間状態，この民族にある道徳的秩序……，それに野蛮と文明との間の中間状態で可能な道徳性の水準であった。」年齢差と性差を結びつけたこの民族の人間像について多面的に抜書きしたペスタロッチは，アビポナーにおける高齢者の尊厳は，その女性たちの活発さと同様，重要だとみた。また，アビポナーの言語がもつ形象性の豊かさをみたが，事物や状況から抽象する言語ではない。これはペスタロッチが文法にもつ関心と似ていた。アビポナーの生と死についての表象もかれの注目をかきたてた。かれが認識できたのは，ふたつの面，ひとつにヨーロッパ外部の文化一般の固有性と，もうひとつに　固有のスイス文化とヨーロッパ諸国のそれとの比較可能性という二面だった。アビポナーの酋長について抜書きしたペスタロッチは，その関連でこう一般化する。「民衆の判断は，つねに賢者の判断に立ち帰る。また野蛮人のもとにも立ち帰り，制約され，エゴイスティックになる。この制約の本質なかで民衆の判断が広がる道筋が究明されねばならない。」（PSW Ⅸ 315）

この事例でわかるペスタロッチの観察方向は，社会と民衆にある社会的，社会心理的，政治－経済的，文化的な所与にあり，それが，かれの読書全般ではっきりと表れている。さらに少しく事例をあげるなら，ペスタロッチ自ら真剣に取り組んだ，ゲオルグ・ロレンハーゲンの（G. Rollenhagen）『カエルとネズミの戦争』（1637）がある（PSW Ⅸ 345－346, 361－364；Miyazaki, 376－391）。この文学的社会像にも多面的な社会的，経済的，教育的かつ心理的な関連事項や独自の展開が見出せる。ノートの該当個所の内容からすればペスタロッチが重視するのは多様な社会階層，その職業と生活や，習俗の捉え方だった。レスヴェスク（P. Ch. Lesvesque）の「スラブの古代について」（1783）と「スラブ語について」（1783），ポポフ（M. W. Popov）の「スラブ人の宗教」（1768）もペスタロッチの注意を喚起した（Miyazaki, 354－364）。ペスタロッチによる言語や宗教の考察にはつねに社会的かつ経済的がアスペクトがあり，それがもつ意味を外国語の概念から取りだし，理解した。また，ウィーンの役人が匿名で出した書物『ベルリンの有識者について』（1782）の紹介からもかれは社会－経済的なアスペクトを入手し〔PSW Ⅸ 391〕，そこで扱われている買春の具体的な社会諸現象を強調した。ドーム（Ch. W. Dohm）の著書『ユダヤ人の市民的改善について』（1783）にたいするペスタロッチの態度も同様に示唆に富

んでおり，なかでもユダヤ人の住民統合その他の問題にも関心をもち，その関連でユダヤ人を受容すべきだとしたのはつねに住民だったとし，かれらはユダヤ人が「安全，食料，授乳の保持」ができる必要があるとする，大胆かつ適切な定式化をする（PSW Ⅸ 938：Miyazaki，283～286)。

ペスタロッチは，そのマニュスクリプトの束のなかでしばしば「道徳秩序」や「…人間について」といった上位概念を使っている。そこにあるかれの理解の発想は，現代の体系的立場からすれば，道徳科学的というよりも，むしろ民族誌的，民俗学的である。「…人間について」という定式化は，多面的な形態をもつ社会的な刻印の意味をもつ。先にも言ったように，かれはフランス・モラリストに近く立っており，哲学も「世間知」のことだった。シャフツベリー（A. E. Shaftesbury）の「道徳秩序の繋がりは習俗によって繋ぎ止められている」(PSW Ⅸ326, Miyazaki，207～223）という定式化をペスタロッチは社会現象一般を理解する概念にした。旅行記の書き手としてのドブリッツホーファーが，「未開の民族は天と地の成立についてその形而上的な観想とおしてわかるのだ」と結論づけるのに対し，ペスタロッチはこう応じる。「.. しかしこれらすべては. . . 社交的であり，かつ社会という小屋のなかにいる風土の果実を味わっていたのだ」(PSW Ⅸ 410，Miyazaki，337～353）と。ペスタロッチはアンクテル（L. P. Anquetil）が書いたルイ14世の詳細な伝記（1793，2版）に登場する田舎の民衆がみせる生活様式にも関心をもった（PSW Ⅹ215)。

当時の文学にもかなり立ち入って取り組んだペスタロッチは，その内容を時代と結びつけながら，自身の著述と向き合った。ノートの手稿は1785から1797年までの時期だが，1780年にかれは大論文『立法と嬰児殺し』を書き上げ，同時に小説『リーンハルトとゲルトルート』の第1巻を1781年，第2巻を1783年に出し，1787年まで続けた。その哲学的主著『人類の発展における自然の道についてのわたしの探究』は1797年に出した。ペスタロッチの読書と著述との相互の関係は個々に跡づけなければならないが，『リーンハルトとゲルトルート』なかでこう記している。「わたしは，ことが起こったままに，それが耳に聞こえたままに語る. . . 」(PSW Ⅱ，158）と。また，別の個所でこう書く。「わたしもまたひとびとの真只中に座っていた」(PSW Ⅱ，352）と。すでに1778年の手紙のなかでかれは「地方の人々の言葉の練習について」語っている（PSB，517)。ペスタロッチがもつ具体性への資質は，その社会的，経済的な視点の方向と結びつけられており，かれの読書行為が，そのテキストの選択と重点の置き方を決めたのと同様に，この言語と社会のふたつの中味が，かれの民俗学的な発想を規定した。ペスタロッチが『リーンハルトとゲルトルート』の再版に立ち戻ったとき，もはや実践関心を政治支配に服させることを意図せず，むしろその民衆の「生活体」エスニー（Ethnie)や「下からの啓蒙主義」を求めたのは，上に述べたことに即しても疑いはない。かれが受容した文献とその執筆活動もそれに動機付けられていた。その関連が作品のタイトルにもとくにはっきりと表れるふたつを挙げるなら，『地方の習俗の価値』と『森〔地方〕の状態

が社交性〔都市〕よりよくなるのはいつか』である。（PSW　I，19ff：199ff，〔この両作品は収録された当座の1778～79でなく，1785～87の執筆である〕

ペスタロッチの読書には－全体としてみれば－主題上，ヨーロッパの文献の代表作が入り，その時期もフランス革命前後の短期間に限られていた。かれは独自の方法で一民族ないし諸民族と社会の基盤にある具体的次元の情報でもって自分の参考事項（知識）を磨いた。それによって後の民衆（Volk）教育の領域で行なうかれの集中的努力の客観的前提になるものをとりだしていたのである。

最後に，この解明を終えるにあたってわたしが述べておきたいのは日本のペスタロッチ研究徒として異文化間での相互理解が展開される必要である。日本のペスタロッチ受容史には百年以上の豊かな歴史があり，すでに数十年前に13巻の著作集が出版されており，百名以上の会員からなる日本ペスタロッチ／フレーベル学会がある。日本のペスタロッチ像は，これまで国家主義的，儒教的，仏教的な着色をされてきたが，積極的に留意されてよいのは，戦前期の学校で児童は文部省発行の教科書でペスタロッチの名を知っていた事実である。ペスタロッチ研究の取組みは20世紀の20年代にはじまったが，戦後は哲学的人間学の傾向をもち，ドイツの精神科学的教育学の影響下にあったため，別の考察方法でのペスタロッチ受容は十分に展開されなかった。日本のペスタロッチ研究は今日なお形成哲学的であり，授業方法の観点はさほど重視されていない。従来からのこのような一面化は，ペスタロッチの作品がかれの文化相互的な面から捉えられるとき，克服されるだろう。ペスタロッチ自身，読書をとおして認識した，この異文化的出発点からこそ，ヨーロッパをこえて現代と将来に実りあるものをえようと真剣に取り組んだのだから。

資　料

A：ペスタロッチのテキストについては，ペスタロッチの全集および書簡集

Pestalozzi, J. H.: S ä mtliche Werke, (PSW), 1927ff Pestalozzi, J. H.: S ä mtliche Briefe, (PSB) 1946ff で示し本稿主題上，これらに収録されていない部分を含め，ペスタロッチが読んだ版本から抜粋した部分の該当箇所や，ときに全文を次の拙著（Miyazaki 1992）で示す。

Toshiaki Miyazaki: Pestalozzi und seine Lektüre－Entfaltung des Bewußtseins über Bildung, Schule und Gesellschaft－, 1992, Braunschweig（宮崎　俊明『ペスタロッチとその読書－教育・学校・社会意識の展開－』）1992，ブランシュヴァイク

B：ペスタロッチに読まれた５７点の図書と論文のうち，本稿で用いた論著

その一覧表については上記拙著ドイツ読本で示す。

Anquetil, Louis Piene: Louis XIV, sa cour et le regent. 2. Ausgabe. 4 Bde. Paris 1793.

Dobrizhoffer, Martin: Geschichte der Abiponcr, einer berittenen und kriegerischen Nazion in Paraguay, 3 Theile 1783-84. In: Deutsches Museum 1785, Bd. 1, S. 515 ff.; Bd. 2, S. 4 ff. (Rezension)

Dohm,Christian Wilhelm: Ueber die bürgerliche Verbesserung der Juden, Erster Theil, zweyte

Ausgabe. Sowie Zweyter Theil. 1783. In:Allgem. deutsche Bibliothek 59. Bd., 1. St., 1784, S. 19 ff. (Rezension)

Briefe über die Galanterien von Berlin, auf einer Reise gesammelt von einem österreichischen Offizier, 1782 [anonymer Verfasser. Johann Friedel]. In: Allgemeine deutsche Bibliothek 59. Band, 1. St., 1784, S. 233 ff (Rezension).

Lesvesque, P. Ch.: Ueber das Alterthum der Slaven, In: Berlinsches Magazin der Wissenchaften und Kunste 1. Jahrg., 4. Stück, 1783, S. 56 f.-Ders.: Versuch über dieAehnlickeit der Slavischen Sprache mit der Sprache der Bewohnerdes alten Latiums, a.a.o. S. 61 f.

Popov. M. W.: Die Religion der Slaven, In: Berlinisches Magazin der Wissenschaften und Künste, 1. Jahrg., 4. Stuck, 1783, S. 86 f. (Zusammenfassung eines Beitrages des Autors aus der russischen Zeitschrift "Dosugi", 1768).

Rollenhagen, Georg: Froschmeuseler. Ausgabe Braunschweig 1637. (Kritische Ausgabe herausgegeben von K. Goedeke 1876).

C. Schriften zu Pestalozzi—スタロッチ研究論文

Birk, I.: Die empirische Basis des pädagischen Denkens bei Pestalozzi, 1970.

Hoof. D.: Pestalozzi und die Sexualität seines Zeitalters, 1987.

Israel, A.: Pestalozzi-Bibliographie, Bd. 3, In: Monumenta Germaniae Paedagogica 31, 1904.

Klink, J. G./Klink, L.: Bibliographie Johann Heinrich Pestalozzi, 1968.

Klinke,W.: Pestalozzi-Bibliographie, 1923.

Kuhlemann, G.: Pestalozzi-Bibliographie 1966 ~ 1977. In: Pägogische Rundschau 1980, 34. Jg., S. 189 ff.

Miyazaki, T.: Pestalozzi und seine Lektüre, 1992.

Oelkers, J./Osterwalder, F. (Hrsg.) : Pestalozzi—Umfeld und Rezeption—, 1995.

Rang, A.: Der politische Pestalozzi, 1967.

Tröhler, D./Müller, M.: Pestalozzi-Bibliographie 1977 ~ 1992. In: Neue Pestalozzi-Studien Band 2, 1994, S. 185 ff.